

参議院選挙の結果をどう見るか、日本共産党の 引き続き躍進をどう勝ち取るか

山下よしき書記局長代行・参議院議員の講演（大要）

2013年7月27日 奈良・参議院選挙勝利報告集会

党奈良県委員会が7月27日に開いた参議院選挙・奈良市長・市議選勝利報告集会での山下芳生党書記局長代行・参議院議員の講演大要を紹介します。

山下さんは選挙戦での奈良県党の奮闘に感謝した後、次のようにのべました。

■最後まで奮闘で勝ち取った5議席

国政選挙での躍進は1998年の参議院選挙以来15年ぶりのことでもあります。ですから、全党の皆さんがものすごく喜んでくださっています。ベテランの方は「これで思い残すことはない」（笑い）。まだ早い、まだ始まったばかりですから。若い方は「初めて選挙で勝てた」。本当に喜びがはじけているという状況だと思います。

比例代表の5議席を絶対に確保するというのが中央委員会総会で私たちが自ら決めた目標でしたので、これを達成できたことは本当によかったと思っています。515万票の比例代表の得票を得たわけですが、あと29万票少なかったら4議席にとどまっていたんです。ですから、最後の最後まで、投票箱のふたがしまるまでの、皆さんの奮闘で勝ち取れた5議席だと思います。

この5議席は、私たち5人の第一次比例代表候補はもちろん、17人の比例候補全員、谷川かずひろさんをはじめ46人の日本共産党の選挙区候補、そういう候補者を先頭にした奮闘、そして党員、後援会員、支持者の皆さん、そして1票を投じてくださった皆さん、今回、1票は投じてくださってはいないけれども期待をされた方々、そういう方々の汗と涙と期待が結晶した5議席だと思っています。「宝の議席」がいつそう輝きを増すように頑張りたいと思っています。

この比例5議席に加えて、東京の吉良佳子さん、大阪の辰巳孝太郎さん、京都の倉林明子さん、非常に個性あふれるフレッシュな方々が、選挙区で東京は12年ぶり、大阪、京都は15年ぶりに勝ったということは大変すばらしい。こういう皆さんも加わり、非改選の3人に加えて、共産党参議院議員団は11人になりました。久方ぶりに議案提案権を得ることができましたので、これをフルに活用して、皆さんの期待に応える新しい議員団の活動をやっていきたいと思っています。これからも皆さんの、大きなご支援を心からお願いしたいと思います。（拍手）

選挙結果をどう見るか

この選挙結果をどうみるかについては、「参議院選挙の結果について」、7月22日付の常任幹部会の声明にまとまっておりますので、これをしっかりと見ていただければありがたいと思います。

それを土台にしながら、今日はまず、この選挙の結果の歴史的な意味について考えてみたいと思います。

■「対決」と「対案」が力に

選挙結果の意味に入る前に、どんな論戦をしたかについて振り返ってみますと、私たちは今度の選挙を「自共対決」の選挙と位置付けました。安倍内閣、自民党に対決するとともに、どんな問題でも抜本的な対案をしめして頑張るのが共産党です。「対決と対案」、その両方を兼ね備えて頑張っているのが共産党ですということを論戦の基本にしました。これが非常に大きな力を発揮したのは間違いありません。



■日本共産党は歴史的にどこまで到達したか

そのうえで、日本共産党は歴史的にどこまで到達したかについて見たいと思います。

戦後の政治の中で日本共産党が躍進した時期は2回ありました。1回目は1970年代の躍進です。このときは衆議院と参議院あわせて国会議員が50人以上になりました。共産党が躍進をしますと、それを阻む反動攻勢という、逆流が必ず生まれます。この70年代の躍進の後に生まれたのは、1980年の「社公合意」、社会党と公明党が政権協議をしまして、社会党が右転落します。社会党は安保を容認するということになりました。そういうふうには社会党を右側に引っ張り込むことがやられました。そして「日本共産党を除く」国会がすすみます。あわせて共産党に対する戦前の問題を利用したいわれなき反共攻撃が国会の舞台でやられることもありました。ですから、70年代に躍進しましたがけれども、「反共攻撃」と「共産党を除く」シフトがしかれ、しばらく苦しい時期がありました。

しかし、共産党を除く各党がまとまって悪い政治をしますので、そのことが分かってきて、次の第2の躍進の時期を迎えます。1990年代後半の躍進の時期です。このときには衆議院、参議院あわせて49人の国会議員ができました。

**近畿ブロック政策宣伝
資料**

2013.7.30
近畿ブロック事務所 06.6764.9111

その後また、このまま共産党を躍進させておくわけにはいかないということで、新たな共産党を伸ばさないシフトがとられます。その中心が「2大政党づくり」であります。菅さん、鳩山さんの旧民主党と小沢さんの自由党を無理やり合体させ、自民党にかわる新しい受け皿としての民主党をつくりました。音頭をとったのは京セラの稲盛会長ですから、財界仕込みの「2大政党づくり」ということがやられました。

これで、しばらくは自民、民主以外は政党にあらず、自民か民主か、どちらが政権をとるのかというキャンペーンがずいぶんやられまして、共産党の行く手を阻むことになりました。そして、民主党が政権を取り、国民を裏切って、2大政党が崩れ始めると今度は、「第3極」ということで維新の会やみんなの党が持ち上げられるというキャンペーンがはられたわけです。

そういう中、私たちは十数年間、1998年の参議院選挙で躍進して以来、国政選挙では前進することができませんでした。それでも歯を食いしばり、不屈にたたかってきました。その壁を、今回、突き崩したわけです。第3の躍進のはじまり、と言ってよい結果をつくることができたのではないかと考えております。

■躍進をつくった3つの要素

今度の躍進をつくることができたのはなぜか。まず、私たち共産党自身の頑張り、主体的な頑張りでは3つ要素があったと思います。

①綱領の力

1つは、この時期に日本共産党の新しい綱領を確定いたしました。今年新しい綱領をつくって10年目です。この綱領で日本共産党はどんな日本をめざすのか、ということ国民の皆さんに分かりやすく訴えることができる旗印を、私たちはもつことになりました。

すぐに社会主義、共産主義をめざすのではなくて、資本主義の枠の中で、あまりにひどい「財界中心」「アメリカいいなり」の政治のゆがみをただそう、この「2つのゆがみ」、「2つの異常」をただして国民が主人公の新しい政治をつくることが、当面、日本が求めている政治の変革ではないかということ、よりわかりやすく打ち出したわけです。さらに、資本主義をのりこえた未来社会では人間社会にどんな展望がひらかれるかも、マルクスの理論に立ち戻って明らかにしました。この綱領を私たちが確定して、もうすぐ10年がたちます。この間、新しい綱領にもとづいて、いろんな政策を発展させてきました。

特に2010年の参議院選挙で後退したのですが、この時の教訓で、単に「反対だけではあかん」ということを私たちは導き出しました。菅さんが消費税10%を打ち出したときに、「消費税増税反対」ということを強く打ち出したのですが、有権者の皆さんは、「反対はよいけれども、では日本の財政はどうするのか。社会保障の財源はどうするのか」と。やはり、そこの疑問が残ったのです。そこに、答えを示すことが2010年の参議院選挙では私たちはできませんでした。

その後、私たちは綱領にもとづいて、その答えを示すということで、「消費税に頼らない別の道があります」ということを経済政策として打ち出すことができました。今度の選挙では、消費税増税反対とともに、「別の道がある」ということを堂々と、わかりやすく、皆さんが語っていただいたということが、大きな力になったと思います。

綱領を確定し、政策を豊かに発展させてきたことが、全党の血となり肉となり、国民に分かりやすく語る力となったことです。

②「一点共闘」の努力

主体的な努力の2つ目は、「一点共闘」の努力です。いろいろな立場、考えの違いを乗り越えて一点で力をあわせようということで、保守の皆さんとも協力・共同をすすめました。TPPの問題ではJA、医師会の皆さんと協力しました。原発事故の後、再稼働の問題では市民運動の皆さん、反原連の皆さんとも力をあわせることができました。

このことは、すぐに私たちの選挙の前進に実を結ぶということは、これまではなかったんですが、今回、そういう方々が「今度は共産党」というようになりました。

先程、寮美千子さん（作家）が「平城宮跡のコンクリート舗装にたいして、ダメだといってくれたのは共産党だけだ」と言っていただいたのも一点共闘の一つかと思います。そういう形でいろいろな分野で、一致点での協力・共同を、私たちが努力してきたということが、今度の選挙では実ったのではないかと考えています。

③自力づくり

私たちの主体的努力の3つ目は、党の自力をつける、強く大きな党をつくる努力をやってきたのではないかと考えています。国民に根差した共産党づくりの努力を、まだまだ十分とは言えませんが、党員を増やし、読者を増やし、そして「綱領・古典の連続教室」など質的にも強い党づくりに努力してきたことが、今度は大きな力になったのではないかと考えております。

■自民党政の行き詰まり

私たちの主体的な頑張りだけではなくて、今度の躍進にとって客観的な条件もあったと思います。

それは自民党政がトコトン行き詰まってきたということです。自民党は今度の選挙の結果、公明党と合わせて参議院でも過半数をとりました。ですから、衆議院と参議院の「ねじれ」は解消されたと言われておりますけれども、では、「ねじれ」が解消されて自民党政権は、これから万々歳でバラ色の道が待っているかというところではありません。自民党政権の行く末はまったく展望がありません。

例えば、「アベノミクス」に展望があるかということ、まったくありません。安倍さんは今度の参議院選挙で「アベノミクスでよくなった、よくなった」と繰り返しました。何がよくなったと言っていたかということ、「雇用が60万人増えました」と言う。しかし、60万人増えたというけれども、逆に正規雇用は数十万人減っているんです。正規は減って、非正規が増えたんです。「雇用は逆に悪くなっている」と志位さんが2度、指摘しましたが、指摘されても、「いや、60万人増えました」と同じことしか言えません。言うことがないわけです。ですから、これからよくなる展望を示すことはできません。逆に悪くなるばかりです。

「アベノミクス」第3の矢、成長戦略で考えられているのは、労働の規制緩和です。「派遣社員を増やし、さらに正社員でも首切り自由の限定正社員をつくる」。そして「消費税を2倍にする」です。ですから、よくなる展望を示すことができないわけです。

やはり、自民党政は「財界中心」、「アメリカいいなり」の2つのゆがみから一歩も抜け出せない、ここに縛られている以上は、国民に明るい展望を示すことはできないということが、いよいよ明らかになった。そのなかで、私たち日本共産党が、これに代わる別の道を示すということで、注目をされるのではないかと考えています。

■「2つの異常」に縛られた政治に未来はない

「2大政党づくり」も、「第3極」も、結局、この2つのゆがみに縛られた古い自民党政治の枠の中で目先を変えるというだけのやり方ですので、ここからは展望が見えないね、同じ応援団だね、同じ仲間だねということが明らかになる中で、日本共産党の前進を阻む反共シフトも、なかなかうまく働かなかったということではないでしょうか。

連続前進のために何が必要か

今度の8議席は大躍進と言ってよいと思います。次に私がお話ししたいのは、それを一過性の躍進に終わらずに、持続的継続的に日本共産党が前進し続けていく、そして共産党も参加する民主連合政府に足を踏み出していく、そういう前進を連続させていくためにこれから、何が大事なのかということです。

■安倍政権の暴走にストップをかける

先程お話しされた寮さんから「これで終わりじゃないよ。期待している」と言っていたことにたいする答えにもなると思いますが、第1は、安倍政権の暴走に全力を挙げてストップをかけるたたかいに取り組む必要があると思います。暴走は始まっております。

8月2日から臨時国会が召集される予定になっておりますが、この国会で、先の国会で廃案になった生活保護改悪法をあわよくば出そうかということを考えておりますし、TPPでは参加に向けた交渉に入っています。それから原発再稼働も申請がいっぱい出ておりますから、年内再稼働がほっとくとやられるということになります。そういう暴走にありとあらゆる可能性を探求して、ストップをかけるために共産党は頑張る必要がまずあると思います。

11 議席の力を発揮

その点で、11 議席の地歩を与えていただいたことで、いろいろな可能性が生まれてくると思います。参議院の場合、10 人以上の議席になりますと院内交渉会派という新しいステージになります。そうなりますと、議院運営委員会—参議院全体を運営する要（かなめ）の委員会—に理事を出すことができます。理事会に入ることができます。この議運の理事会で消費税増税の法案などについて、いつから審議入りしましょうかということを決めますが、そこに共産党の理事が久方ぶりに復活します。「そんなものはだめ」と直接言えるようになり、大きな力になると思います。

また、本会議での代表質問を増やすことができます。今まで年に2回しかできていなかった。1月に首相はじめ4大臣がおこなう演説に対する代表質問と決算が発表されたときの代表質問です。これからはすべての重要法案について本会議でほとんどの場合、代表質問をすることができることとなります。

10 人になりますと、党首討論に参加する資格、権利が復活することになります。しかし、これは残念ながら資格であり権利です。自動的に志位委員長が党首討論に出られるかというところではない。党首討論をやる舞台は衆議院と参議院の国家基本政策委員会というところで、合同して委員会を開いてやりますが、衆議院の国家基本政策委員会の委員を今、共産党はもっていない。前回、去年の衆議院選挙で議席が減りましたので、それまで委員がいましたが、どこかの委員会を吐き出さなければならないということになりました。といっても、各常任委員会、大事な委員会ばかりですから吐き出すところがなくて去年の暮れに国家基本政策委員会から抜けたのです。そこをどうするか、いま穀田国対



委員長があの手この手と考えてくれているところです。

提案権は効果的に活用

11 議席になったということが大きいんです。無条件で議案提案権が復活します。法律案を共産党単独で出すことができます。予算をともなう議案提案権は21 議席以上が必要ですが、予算をともなわない議案を提案できますので、たとえば「ブラック企業」根絶の緊急提案などを出すことができます。

ただ、出せばいいということでもないということも学びました。いくつ出しても、審議しないまま棚上げにされてしまうことも多いので、やはり国民のたたかい、世論と運動に依拠しながら、効果的に出す。共産党だけで出すのではなく、他党と共同して一緒に出すことも考える。独自でも出す権利があるから、他党への働きかけのパワーがアップします。いずれにしても、議案提案権をいかに効果的に活用するか、ただちに検討していきたいと思えます。

世論・運動との共同が一番の基本

まずは、要求実現とともに、悪法・悪政にストップをかける、ありとあらゆる可能性を追求したいと思いますが、やはり、そうはいっても11人ですから、これで国会がガラッとかわってバラ色だと思すぎないことが大事です。(笑)

自公が過半数をとっているわけですから、やはり私たちの基本は、私たち議員団も頑張りますけれども、国会の中だけで、また他党との共同と言っても共同できる相手はそんなにいない。民主党は今まで、国民を裏切って消費税増税、沖縄基地建設など、自民党がやりたいことを民主党政権で道をつけたわけですから、野党になったから一緒にやろうと言っても、なかなかできませんね。

そういう意味で国民の世論と運動と共同する、国民との共同が一番の基本になります。皆さんといっしょに共産党の草の根の力を発揮して、国民との共同を広げたいと思えます。

■日本共産党を丸ごと知ってもらおう努力をうんと強める

第2に、今後、共産党の躍進を継続させるうえで、日本共産党をまるごと知っていただくための取り組みをうんと強める必要があると思えます。

日本共産党の路線や歴史や理念を、理解していただく努力をしたいと思っております。そのことを通じて日本の革新的変革を担ってくださる方を多数派にしていく。共産党が国会で多数派になることを抜きに日本の変革はありえません。共産党をまるごと知っていただく方が多数になるということを、どうしても私たちは独自に努力する必要があると思えます。

「共産党は大企業のことをどう思っているのか」「大企業を潰せと思っているのか」、そういう方がたくさんいると思えます。

「それは困る」と。私たちはそんなことは考えていません。大企業は非常に大きな社会的影響力をもっている。したがって、その社会的影響力にふさわしい社会的責任を大企業に果たしてほしい、雇用に対する責任、下請け・中小企業に対する責任、地域経済に対する責任、こういう企業の社会的責任を大企業こそ果たすべきではないか、ということをご提案しています。そのことを通じて労働者の雇用、賃金も向上し、中小企業の経営も安定する。購買力が高まり、健全な日本経済の成長が開けてくる。大企業の健全な発展も道が開けてくる。このように日本共産党は考えているんですよということを丁寧に知らせていくことが必要です。

それから、「アメリカといつもけんかばかりしている」と思っている方がおられます。そうではない。アメリカは、民主主義がもっとも最初に発展した国としてすばらしい歴史をもっています。ただし、今のアメリカの外交政策については厳しく批判されなければならない。覇権主義の誤りを私たちは厳しく批判しているんです。

さらに、「中国との関係はどう考えるのか」とか、いろいろと疑問があると思いますので、日本共産党についてまるごと理解をしていただく努力を、本格的にこれから、いよいよする必要があるのであるかと思っています。

率直に言って、今度の結果は自民党政治に対する批判票、批判の受け皿にはなったと思いますが、共産党をまるごと理解して投票したという方は、新たに入れたという方のなかではまだ一部だと思います。やはりまるごと理解してもらう方を、これから、広げに広げていくという点での努力をすることです。

■強く大きな党づくりに力をつくす

第3に、やはり、強く大きな共産党をつくっていく、党づくりにこれから力をつくしていきたいと思っています。

その点で、1月の党旗びらきで、「溶け込み結びつく力」を発揮しよう、一人ひとりの結びつきや特技を生かした活動で共産党の影響力を広げることに挑戦しようという話がありました。

今回、澤田県委員長からもお話があったように、「マイ名簿」に基づく対話・支持拡大や選挙ハガキを自分の知っている人に、一言書いて送り、電話で折り入ってお話があるということが全国でひろがりました。やはり、自分のつながりに声をかけることほど強いものはないということが、選挙をつうじて確信になったとおもいます。こういう「溶け込み結びつく力」を、選挙で発揮した力を今度は党づくりに結実させるということも大事なことではないかなと思います。

職場・青年での前進に大きな条件

もう1つ、選挙戦を通じて、大きな条件ができたなと感じるのは職場です。特に、大企業の職場なんです。大企業職場というのは連合系労働組合が支配していて、民主党1党支持の押しつけがやられてきました。ところが、今度はそれがまったく通用しない。だって、民主党を応援して政権についたのに、まったく労働者を裏切ったということで、その締め付けがまったくききません。ロッカールームで着替えをしていた共産党員に若い労働者が寄ってきて、「今度の選挙はおたくですね」と話しかけてきた。選挙の話が職場でできたのはこれが最初だというような話が、あちこちの大企業職場でおこりました。

こういう新たな条件を生かし、職場の中で、これまでは社会民主主義勢力が支配しておりましたがけれども、民主党が裏切ったことによって、中間政党が信頼を失いましたので、やはり、自民党と対決して労働者の利益を守るのは日本共産党しかないという

ことが、多くの労働者の意識になりました。そういうことを生かした職場での党づくりを、労働者の党ですから、ここでの運動、党づくりを強める努力をしたいと思っています。

もう1つは青年のなかで共産党が新鮮な共感を呼んだということも間違いのないと思います。谷川さん（選挙区候補）にも先頭にたっただけでしたが、特に大きかったのは雇用問題です。「ブラック企業」という言葉が若者のなかでキーワードになりました。「ブラック企業」という言葉を発するだけで足が止まったり、ビラを受け取りに来てくれたりということがありました。

原発問題も若者の大関心事です。憲法を改定して若者を戦場におくろうというとき、行くのは若者ですから、「あなたは戦場にいきますか。あなたは恋人を戦場におくりますか」、これが若者に非常に響きました。今度は若者を共産党に迎え入れることにも実らせていきたいと思っています。

それから、この10年来、力をいれてきた新しい綱領を学ぶ綱領教室、これも引き続き、力をいれる必要があると思います。日本共産党をまるごと知ってもらうためには、まだまだ力をつけなければなりませんので、こういう科学的世界観を身に着ける努力をお互いにしていきたいなと思っています。

せつかく15年ぶりに、本当に心から喜ぶことができたわけです。「第3の躍進」の始まりです。引き続き「押し寄せ」でいくためには、そういう努力をお互いにやろうではないか。そういう努力をすれば、これまでは第1の躍進、第2の躍進の時期には中間政党が残った。しかし、今度は中間政党が軒並みなくなった。選挙の結果、いよいよ「自共対決」が鮮明になった。第3の躍進を本格的におこす、客観的にはその条件はかなりあると思っています。

次の国政選挙では民主連合政府に足がかかる躍進を

次の国政選挙はおそらく3年間ないかもしれませんが。参議院の選挙、衆議院の選挙、ダブルで3年後にあるかもしれません。そこで、民主連合政府に足がかかったという結果を、いまから努力して、力をたくわえてやろうではありませんか。

その前の年に、いっせい地方選挙です。今度の選挙も都議選があったからという面があります。都議選でどんと伸びて第3党になった。これで、有権者の党に対する見方が大きく変わり、党員、後援会員、支持者も「参院選もがんばれば躍進できる」と元気になりました。

あの都議選がなかったら、去年の総選挙で後退したまま、いきなり今度の参議院選挙になっていたら、こういう感じにはなっていなかったと思います。やはり、地方選挙は大事です。いっせい地方選挙が2年後にありますので、ここで躍進して、そして3年後、おそらく衆参ダブル選挙になろうかと思っていますけど、次の国政選挙で大躍進するために、今から準備して頑張ろうではありませんか。（拍手）